



森野賽郭 篇2

薬園の発展

山野で薬草を採集する役目の採薬使^{さいやくし}は、全国各地に点在する江戸幕府領内の薬用資源の調査・採集のため、各地を訪れました。宇陀松山の森野賽郭は、享保14年(1729)の調査をはじめ、享保17年(1732)の伊勢・紀伊・大和・若狭・越前・美濃の調査、享保20年(1735)の三河・伊勢・志摩・伊賀・大和の調査、寛保3年(1743)の伊勢・美濃・近江の調査にも採薬使の植村左平次^{さへいじ}に随行しました。

こうした採薬調査に協力した功績により、享保14年(1729)以降、幕府から貴重な薬草木が賽郭に与えられました。元文5年(1740)の森野薬園の植物目録では、薬草木は128種を数え、薬園が着実に整備されてきたことがわかります。

賽郭は、採薬調査が進むとともに江戸へ赴く機会も増え、植村や平賀源内、幕府の医官らとの交流を通じて生薬の鑑別や栽培技術の工夫に努め、自身の薬園を充実させていきました。この頃、植村は、江戸駒場御薬園預かり^{こまばおやくえん}となっており、その関係から、賽郭の薬園は次第に幕府官園の補助機関としての役割を担っていきました。

賽郭は、寛延2年(1749)に家督^{かとく}を息子の武貞に譲りました。賽郭は、薬園内の高台に「桃岳庵^{とうがくあん}」という建物を建て、ここで薬園を見守る傍ら、本草の研究に打ち込みました。その研究の集大成といわれているのが、賽郭自身の細密な描写による彩色動植物図譜『松山本草^{しょうざんほんそう}』全10巻です。いろいろな動植物などが丁寧・正確に描かれています。

薬園は次代へと受け継がれ、発展の道を歩みます。武貞は、幕府の薬草御用として薬園で栽培する薬草の種類を増やし、生産・加工する薬種を大坂や京都の薬種商に広く販売しました。

